

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 07-160292

(43)Date of publication of application : 23.06.1995

(51)Int.Cl.

G10L 7/04

G10L 9/18

(21)Application number : 05-306898

(71)Applicant : SONY CORP

(22)Date of filing : 07.12.1993

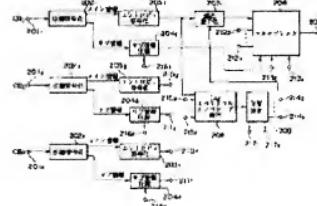
(72)Inventor : AKAGIRI KENZO

(54) MULTILAYERED CODING DEVICE

(57)Abstract:

PURPOSE: To improve compressibility and to perform bit distribution among channels by detecting energy for each channel and performing encoding in which information quantity of each channel is allocated with a ratio in accordance with this detected output.

CONSTITUTION: This device has compression-encoding circuits 2021-202n and entropy encoding circuit 2031-203n being a first encoding means in which digital audio signals of each channel CH1-CHn are inputted and the digital audio signals are compression-encoded. This device has also a second encoding means in which an output encoded signal of the first encoding means is supplied, energy for each channel is detected, and encoding is performed in which information quantity of each channel is allocated. This second encoding means has a Log spectrum envelop detecting circuit 208, a distribution deciding circuit 209, an adaptive quantization circuits 2031-203n, and a sub-information compression circuit 2041-204n. Thereby, bit distribution among channels and high compressibility can be realized.



(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平7-160292

(43) 公開日 平成7年(1995)6月23日

(51) Int.Cl.
G 10 L 7/04
9/18

識別記号
G
C

P I

技術表示箇所

特許請求 本願求 華求項の数1 O.L (全 13 頁)

(21) 出願番号 特願平3-306998

(71) 出願人 000002185

(22) 出願日 平成5年(1993)12月7日

ソニー株式会社
東京都品川区北品川6丁目7番35号

(72) 発明者 宗網 健三
東京都品川区北品川6丁目7番35号 ソニー
一株式会社内

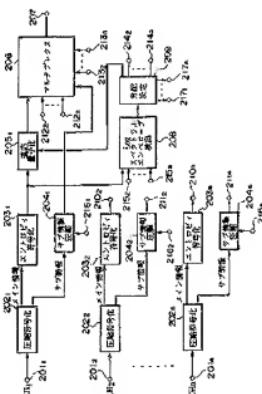
(74) 代理人 弁理士 小池 見 (外2名)

(54) 【発明の名称】 多層符号化装置

(57) 【要約】

【構成】 各チャネルCH1～CHnのデジタルオーディオ信号を圧縮符号化する圧縮符号化回路202、～202。及びエンタロビィ符号化回路203、～203。と、メイン情報(圧縮符号化されたデジタルオーディオ信号)から各チャネル毎のエネルギーを検出してこの検出結果に応じた比率で各チャネルのビット配分を決定するショッピングカートルエンベロープ検出回路208及び配分決定回路209と、この配分決定回路209からのビット配分情報を基づいて、逆応量化回路205、～205。においてメイン情報を逆量化すると共に、サブ情報圧縮回路204、～204。においてサブ情報(語長情報やスケールファクタの情報)を圧縮する。

【効果】 チャネル間ビット配分と高圧縮比とを実現する。



(2) 特開平7-160292

1

2

【特許請求の範囲】

【請求項1】 多数チャネルのディジタルオーディオ信号を多層符号化する多層符号化装置において、各チャネルのディジタルオーディオ信号が入力され、当該ディジタルオーディオ信号を圧縮符号化する第1の符号化手段と、

上記第1の符号化手段の出力符号化信号が供給され、チャネル毎のエネルギーを検出し、この検出出力に駆動した比率で、各チャネルの情報量を割り当てる符号化を行う第2の符号化手段とを有してなることを特徴とする多層符号化装置。

【免責の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は、例えば、映画フィルム映写システム、ビデオテープレコーダー、ビデオディスクプレーヤ等のステレオや、いわゆるマルチサラウンド音響システムにおいて用いられるマルチチャネルのディジタルオーディオ信号を圧縮符号化する多層符号化装置に関するものである。

【0002】

【従来の技術】 オーディオ或いは音声等の信号の高能率符号化の手法及び装置には種々があるが、例えば、時間領域のオーディオ信号等を単位時間毎にプロック化してこのプロック毎の時間軸の信号を周波数軸毎の信号に変換(直交変換)して複数の周波数帯域に分割し、各帯域毎に符号化するプロック化周波数帯域分割方式、いわゆる変換符号化(トランസンフｫームコーディング)や、時間領域のオーディオ信号等を単位時間毎にプロック化しないで、複数の周波数帯域に分割して符号化する非プロック化周波数帯域分割方式である帯域分割符号化(サブバンドコーディング: SBC)等を挙げることができる。また、上述の帯域分割符号化と変換符号化を組み合わせた高能率符号化の手法及び装置も考えられており、この場合には、例えば、上記帯域分割符号化で帯域分割を行った後、該各帯域毎の信号を周波数軸毎の信号に直交変換し、この直交変換された各帯域毎に符号化が施される。

【0003】 ここで、上述した帯域分割符号化の帯域分割用フィルタとしては、例えばQMF等のフィルタがあり、これは1976 R.E.Crochiere Digital coding of speech in subbands Bell Syst.Tech.J. Vol.55, No.8 1976に述べられている。また、ICASSP 83, BOSTON Po Tiphase Quadrature filters-A new subband codinatique Joseph H. Rothweiler には等バント幅のフィルタ分割手法及び装置が述べられている。

【0004】 また、上述した直交変換としては、例えば、入力オーディオ信号を所定単位時間(フレーム)でプロック化し、該プロック毎に高速フーリエ変換(FFT)、コサイン変換(DCT)、モダフィードDCT変換(MDCT)などをを行うことで時間軸を周波数軸に

変換するような直交変換がある。このMDCTについては、ICASSP 1987 Subband/Transform Coding Using Filter Bank Designs Based on Time Domain Aliasing Cancellation J.P.Princen A.B.Bradley Univ. of Surrey Royal Melbourne Inst.of Tech.に述べられている。

【0005】 更に、周波数帯域分割された各帯域成分を量子化する場合の周波数分割極としては、例えば人間の聽覚特性を考慮した帯域分割がある。すなはち、一般に周帯域(クリティカルバンド)と呼ばれている高域帯域幅が広くなるような帯域幅で、オーディオ信号を複数(例えば5バンド)の帯域に分割することがある。また、この時の各帯域毎のデータを符号化する際にには、各帯域毎に所定のビット配分或いは、各帯域毎に適応的なビット配分による符号化が行われる。例えば、上記MDCT処理されて得られた係数データを上記ビット配分によって符号化する際には、上記各ブロック毎のMDCT処理により得られる各帯域毎のMDCT係数データに対して、適応的な配分ビット数で符号化が行われることになる。

- 【0006】 上記ビット配分手法及びそのための装置としては、次の2手法及び装置が知られている。IEEE Transactions on Acoustics, Speech, and Signal Processing, vol. ASSP-25, No.4, August 1977では、各帯域毎の信号の大きさとともに、ビット配分を行っている。また、ICASSP 1980 The critical band coder—digital encoding of the perceptual requirements of the auditory system M.A. Kransmer MIT では、離散マスキングを利用することで、各帯域毎に必要な信号対経験比を得て固定的なビット配分を行う手法及び装置が述べられている。

【0007】 ここで、例えば上述したようなサブバンドコーディング等を用いたオーディオ信号の高能率圧縮符号化方式においては、人間の聽覚上の特性を利用し、オーディオデータを約1/5に圧縮するような方式が既に実用化されている。なお、このオーディオデータを約1/5に圧縮する高能率符号化方式としては、例えばいわゆるATRAC(Adaptive Transform Acoustic Coding)と呼ばれる方式が存在する。

【0008】 さらに、通常のオーディオ機器の場合のみならず、例えば映画フィルム映写システム、高品位テレビジョン、ビデオテープレコーダー、ビデオディスクプレーヤ等のステレオないしはマルチサラウンド音響システムにおいては、例えば4～8チャネル等の複数チャネルのオーディオ或いは音声信号を扱うようになりつつあり、この場合においても、ビットレートを削減する高能率符号化を行なうことが望まれている。

【0009】 特に、業務用においては、ディジタルオーディオのマルチチャネル化が進んでおり、例えば8チャネルのデジタルオーディオ信号を扱う機器が登場してきている。上記8チャネルのディジタルオーディオ信号

(3) 特開平7-160292

4

を扱う機器としては、例えば映画フィルム映写システム等がある。また、高品位テレビジョン、ビデオテープレコーダー、ビデオディスクプレーヤ等のステレオないしはマルチサウンド音響システムにおいても、例えば4～8チャネル等の複数チャネルのオーディオ或いは音声信号を扱うようになりつつある。

【0014】ここで、上記8チャネルのデジタルオーディオ信号を扱う映画フィルム映写システムにおいては、上記映画フィルムに対して、例えば左チャネル、右チャネル、レフトセントチャネル、センタチャネル、ライトセントチャネル、ライトチャネル、サラウンドレフトチャネル、サラウンドライトチャネル、サブウーファチャネルの8チャネルのデジタルオーディオ信号を記録することが行われつる。なお、上記映画フィルムに記録する上記8チャネルの各チャネルは、例えば当該映画フィルムの画像記録領域から再生された画像が映写機によって投影されるスクリーン側に配置される左スピーカ、レフトセントスピーカ、センタスピーカ、ライトセントスピーカ、ライトスピーカ、サブウーファスピーカ、観客席を取り囲むように左側に配置されるサラウンドレフトスピーカ及び右側に配置されるサラウンドライトスピーカと対応するものである。

【0015】ただし、映画フィルムに上記8チャネルのデジタルオーディオ信号を記録する場合において、映画フィルムには、例えばいかゆるCD（コンパクトディスク）などで用いているようなサンプリング周波数4.1kHzにて16ビットの直進音量化されたオーディオデータを上記8チャネル分も記録できる領域を確保することは困難であるため、上記8チャネルのオーディオデータを圧縮して記録するようになれる。例えば、当該8チャネルのデジタルオーディオデータを圧縮する圧縮方法としては、上述したような人耳の聴覚の特性を考慮して最適なビット割り当てを行うことによって、例えばいかゆるCD（コンパクトディスク）などに記録されるようなサンプリング周波数4.1kHzにて16ビットのデジタルオーディオデータを約1/5に圧縮しながらも、CD並の音質を達成する前記高品位符号化方式（いかゆるATRAC方式など）を適用するようになっている。

【0016】また、フィルムという媒体は、表面に傷などが発生しやすいため、デジタルデータをオリジナルのまま記録していくのは、データ欠けが激しく実用にならない。このため、エラー訂正符号の能力が非常に重要な上記データ圧縮は、その訂正符号も含めて上記フィルム上の記録領域に記録可能な程度まで行う必要がある。

【0017】

【免明が解決しようとする課題】しかし、上述のようなマルチチャネルのオーディオ信号を高品位符号化する方式では、各チャネル毎に圧縮が行われるため、全体として

のビット配分量（バイト配分量）が必ずしも有効に使用されているとは言い難い。例えば、あるチャネルには少ないビット配分でもよいが、他のチャネルではより多くのビット配分を必要とする場合がある。このように、従来の高品位符号化方式では、各チャネル毎に分けてビット配分量（バイト配分量）を読みると無駄が多いと思われる。特に、各チャネル毎にビット配分量（或いはバイト配分量）が固定されている場合には、上記のような無駄がさらに顕著になると考えられる。近年は、さらに圧縮率を高めることも望まれている。

【0018】そこで、本発明は、上述したようなことに鑑み、より圧縮率を高めることができるように共に、チャネル間のビット配分を可能とする多層符号化装置を提供することを目的としている。

【0019】

【課題を解決するための手段】本発明は、上述の目的を達成するために提案されたものであり、本発明の多層符号化装置は、複数チャネルのデジタルオーディオ信号を多層符号化するものであり、各チャネルのデジタルオーディオ信号が入力され、当該デジタルオーディオ信号を圧縮符号化する第1の符号化手段と、上記第1の符号化手段との出力符号化信号が供給され、チャネル毎のエネルギーを検出し、この検出出力に応じた比率で、各チャネルの符号量を割り当てる符号化を行なう第2の符号化手段とを有してなることを特徴とするものである。

【0020】

【作用】本発明によれば、第1の符号化手段で各チャネルのデジタルオーディオ信号を圧縮符号化した後、この第1の符号化手段の出力符号化信号に対して、さらに第2の符号化手段によってチャネル毎のエネルギーに応じた比率で、各チャネルの情報量を割り当てる符号化を行うことでチャネル間のビット配分と高圧縮率を実現している。

【0021】

【実施例】以下、本発明の実施例について図面を参照しながら説明する。
【0022】図1には、本発明実施例の多層符号化装置の要部の構成を示す。

【0023】本発明実施例の多層符号化装置は、この図1に示すように、複数チャネルC1～CHnのデジタルオーディオ信号を多層符号化するものであり、各チャネルC1～CHnのデジタルオーディオ信号が入力され、当該デジタルオーディオ信号を圧縮符号化する第1の符号化手段としての圧縮符号化回路202、～202.2、及びエンコード（符号化回路203、～203.2）と、上記第1の符号化手段のエンコード（符号化回路203、～203.2）からのメイン情報の符号化信号（圧縮符号化回路202、～202.2）、からの圧縮符号化されたり（デジタルオーディオ信号）が供給されたりチャネルC1～CHn毎のエネルギーを検出するシグナルトラ

(4)

特開平7-169292

10

ルエンペーロ⁸検出回路210と、このLo_gスベクトルエンペーロ⁸検出回路208からの検出力に応応じた比率で各チャネルに割り当てる情報量を検出する(比特配分を行う)。配分決定回路209と、この配分決定回路209からの比特配分情報を基づいて、速応置子回路205、~205。(回路205、~205の、図示は省略)において上記エンコード付符号化回路213、~203。からのメイン情報の符号化信号を適応的に置子化すると共に、サブ情報圧縮回路204、~204。において上記圧縮符号化回路202、~202。からのディジタルオーディオ信号の圧縮符号化に連携するサブ情報(語義情報やスケルロフカの情報を含む)を速応的に圧縮符号化する第2の符号化手段⁹(Lo_gスペクトルエンペーロ⁸検出回路208、配分決定回路209、速応置子回路203、~203。),サブ情報圧縮回路204、~204.)とを有してなることを特徴とするものである。

【0020】なほ、本発明の多塵荷号化装置によって圧縮荷号化された各チャネルのディジタルオーディオ信号は、伝送路を介して送達されたり、記録媒体に記録されたりする。当該記録媒体として、例示すればフィルムへの記録や、光ディスク、光磁気ディスク、相変化型光ディスク、磁気ディスク等のディスク状記録媒体、磁気テープ等のテープ状記録媒体への記録、半導体メモリ、ICカードなどへ記録される。

【0021】ここで、上記掲載媒体として映画フィルムを用い、この映画フィルムへの記録を行う場合の上記各チャネルは「S」～「CH 8」は、例えは右に示すようにスピーカーが配置されるデジタルサラウンドシステムに対応することになる。各スピーカーに対するチャネルは、センタ（C）チャネル、サブウーファ（SW）チャネル、レフト（L）チャネル、ライトセンタ（CL）チャネル、ライト（R）チャネル、ライトセンタ（CR）チャネル。

チャネル、レフトサラウンド（LB）チャネル、ライトサラウンド（RB）チャネルの8つである。
〔0922〕すなはちこの図2において、上記スピーカ配置に対応する各チャネルは、例えば当該映像フィルムの画像記録領域から再生された画像が映像線（プロジェクタ1000）によって投影されるスクリーン101側に配置されたレフスピーカ106、レフトセンタースピーカ104、センタースピーカ102、ライトセンタースピーカ105、ライトスピーカ107、サラウンドドットスピーカ108及び200、サラウンドライトスピーカ109及び201、サブウーファスピーカ103と表示されている。

[0023] 上記センタスピーカ102は、スクリーン101側の中央に配置され、センタチャネルのオーディオデータによる再生音を出力するもので例えば群衆のせりふ等の最も重要な再生音を出力する。上記サブウーファスピーカ103は、サブウーファチャネルのオーディ

オーディオによる再生音を出力するもので、例えば爆発音などの低音の音とそういうように振動して感じられる音を効果的に出力するものであり、爆発シーンなどに効果的に使用されることが多いものである。上記レフトスピーカー106及びライトスピーカー107は、上記スクラン101の左方に配置され、レフトチャネルのオーディオデータによる再生音とライトチャネルのオーディオデータによる再生音を出力するもので、ステレオ音響効果を発揮する。上記レフトセンタスピーカー104とライトセンタスピーカー105は、上記センタスピーカー102と上記レフトスピーカー106及びライトスピーカー107との間に配置され、レフトセンタチャネルのオーディオデータによる再生音とライトセンタチャネルのオーディオデータによる再生音を出力するもので、それそれ上記レフトスピーカー106及びライトスピーカー107の補助的な役割を果す。特にスクリーン101が大きくなり収容音数の多い映画館等では、座席の位置によって音像の定位が不安定になりやすいが、上記レフトセンタスピーカー104とライトセンタスピーカー107を行かすことにより、音像のよりリアルな定位を作り出すのに効力を発揮する。さらに、上記サラウンドレフトスピーカー108とサラウンドライトスピーカー109は、腰痛席を取り囲むように配置され、サラウンド左チャネルのオーディオデータによる再生音とサラウンドライトチャネルのオーディオデータによる再生音を出力するもので、腰痛席や船頭、戸戸に包まれた印象を与える効果がある。これにより、より立体的な音響を作り出すことができる。

【0024】図1に従って、本実施例の多属性化装置について説明する。この図において、各入力端子D1-D4、D1-D2へは、それぞれ対応する各チャネルのデジタル音源信号が入力される。

イジタルオーディオ信号が供給される。
【0025】各入力端子201、～201。に供給される各チャネルのデジタルオーディオ信号は、対応する各圧縮符号化回路202、～202。に送られて、ここで各チャネル毎にそれぞれ圧縮符号化される。なお、各圧縮符号化回路202、～202。の詳細な構成について後述する。

【0026】各压缩符号化回路202、～202、で圧縮符号化されたディジタルオーディオ信号は、メイン情報としてエンコードビット符号化回路203、～203、に送られ、ここで、それそれが同変更符号化される。上記圧縮符号化回路202、～202、でのディジタルオーディオ信号の圧縮符号化に間接する後述する語

長情報やスクエアの情報は、サブ情報としてサブ情報圧縮回路204、～204に送られ、ここで各チャネル毎のピット配分情報を基づいて圧縮される。
[0927] 上記エンタロピィ符号化回路2(3)、～2(3)、からのエンタロピィ符号化された各メンイ情報は、適応疊合回路205、～205に送られると共に、Logスケラルエレベーピード出回路2(8)に

も送られる。なお、図1では、チャネルC H2～C Hnの各エントロビィ符号化回路203、～203nからのエントロビィ符号化されたメイン情報は、それぞれ対応する端子210；～210nから、図示を省略している各チャネルC H2～C Hnに対応する適応音子化回路205、～205nに送られると共に、端子215；～215nを介して上記Logスベクトラルエンベロープ検出回路208に送られるようになっている。

【0028】上記エントロビィ符号化された各メイン情報が供給されるLogスベクトラルエンベロープ検出回路208では、これら各チャネルのメイン情報からそれぞれエネルギーを検出し、各チャネルのLogスベクトラルエンベロープを検出する。当該各チャネルのLogスベクトラルエンベロープ情報は、上記配分決定回路209に送られる。

【0029】当該配分決定回路209では、上記Logスベクトラルエンベロープ検出回路208からの各チャネルのLogスベクトラルエンベロープ情報を基づいて、各チャネルのメイン情報に対するチャネル間ビット配分情報を、サブ情報に対するチャネル間ビット配分情報を決定する。

【0030】上記配分決定回路209からの上記メイン情報に対するチャネル間ビット配分情報は、適応量子化回路205、～205nに送られ、上記サブ情報に対するチャネル間ビット配分情報を、上記サブ情報圧縮回路204、～204nに送られる。なお、図1の例では、チャネルC H2～C Hnのメイン情報に対するチャネル間ビット配分情報は端子214；～214nを介して図示を省略している適応音子化回路205、～205nに送られ、チャネルC H2～C Hnのサブ情報に対するチャネル間ビット配分情報は端子217；～217n及び端子216；～216nを介してサブ情報圧縮回路204；～204nに送られる。

【0031】上記適応音子化回路205、～205nでは、上記メイン情報に対するチャネル間ビット配分情報を用いて、上記エントロビィ符号化回路203；～203nからエントロビィ符号化されたディジタルオーディオ信号を適応的に量子化する。

【0032】また、上記サブ情報に対するチャネル間ビット配分情報を用いて、上記圧縮符号化回路202；～202nからサブ情報（諸長情報、スケールファクタ情報）を圧縮符号化する。

【0033】上記適応音子化回路205、～205nとサブ情報圧縮回路202；～202nからの各出力は、マルチブレクサ206に送られる。なお、チャネルC H2～C Hnの図示を省略している適応音子化回路205、～205nからの各出力は、端子212；～212nを介して上記マルチブレクサ206に送られ、チャネルC H2～C Hnのビット情報圧縮回路205；～205n

からの各出力は、端子213；～213nを介して上記マルチブレクサ206に送られる。

【0034】当該マルチブレクサ206では、供給された各データをマルチブレクスして端子207から出力する。この出力データが符号化データとして例えば記録媒体等に記録される。

【0035】また、図1の本実施例装置においては、例えば図3に示すように、上記圧縮符号化回路202；～202nに対して供給する各チャネルのディジタルオーディオ信号から少くとも2チャネル毎（図3の例では全チャネル毎）に対応してそれぞれ設けたハイパスフィルタ222によって高域成分のみを取り出した後、これららの高域成分を加算回路223によって加算し、端子225を介して当該高域成分の加算データに対して、所定の処理、例えば圧縮符号化、エントロビィ符号化及び量子化の処理を施すようにすることもできる。このとき、上記高域成分を取り出す各チャネルのハイパスフィルタオーディオ信号からは、それぞれローパスフィルタ221によって低域成分を取り出し、端子224を介して

20 対応する圧縮符号化回路202；～202n、～202nに送るようになる。その後、上記高域及び低域成分を取り出す各チャネルのうち、ある1つのチャネル（図3の例ではチャネルC H1）の上記マルチブレクサ206へ入力するメイン情報を対して、上記所定の処理を経した加算データを加算する処理（チャネル間クロストーク処理）を行うようになる。

【0036】ここで、上記各チャネルの高域成分を加算して、ある1つのチャネルの低域成分に加算することを行なうのは、以下の理由による。

【0037】すなわち、人間の耳は高域の周波数に対する定位感が少なく、このため高域成分については例えは複数個のスピーカのうちのいずれか1つのスピーカからでいても人間にほどのスピーカから出てきているのか聞き取り難いという性質がある。このため、複数チャネルのオーディオ信号の各高域成分を、そのうちの例えば1チャネルに依存するスピーカのみに送るうとしても、人間には各チャネルのオーディオ信号の高域成分が当該1つのスピーカのみから出力されているとは感じられない。したがって、上述のように、上記各チャネルの高域成分の音声を加算して、この加算データをある1つのチャネルに依存するスピーカのみに送ることによって、各チャネルの高域成分を1つのチャネル分に圧縮できることになる。

【0038】次に、上記図1に示した圧縮符号化回路202；～202nの具体的な構成について説明する。

【0039】これら圧縮符号化回路202；～202nでは、オーディオPCM信号等の入力データ（デジタル信号）を、帯域分割符号化（SBC）、適応変換符号化（ATC）及び適応ビット配分（APC-AB）の各技術を用いて圧縮符号化している。

【0040】以下、図4を用いて説明する。図4に示す

(6)

特開平7-160292

10

本実施例の圧縮符号化回路202、～202。では、入力デジタル信号をフィルタなどにより復数の周波数帯域に分割すると共に、各周波数帯域毎に直交変換を行つて、得られた周波数搬送のスペクトルデータを、後述する八箇の適応特性を考慮したいわゆる範界帯域幅(クリティカルバンド)毎に適応的にビット配分して符号化している。この時、高域では範界帯域幅を更に分割した帯域を用いる。もちろんフィルタなどによる非ブロッキングの周波数分割は等分割としてもよい。さらに、本実施例においては、直交変換の前に入力信号に応じて適応的にブロックサイズ(ブロック長)を変化させると共に、クリティカルバンド単位ではなく高域では範界帯域幅(クリティカルバンド)を更に細分化したブロックでフロー処理を行つて、このクリティカルバンドとは、人間の聴覚特性を考慮して分割された周波数帯域であり、ある純音の周波数近傍の同じ強さの狭帯域バンドノイズによって該該音がマスクされるときのノイズの持つ帯域のことである。このクリティカルバンドは、高域ほど帯域幅が広くなっている、上記0～22kHzの全周波数帯域は例えば2つのクリティカルバンドに分割されている。

【0041】すなわち、図4において、入力端子10には例えば0～22kHzのオーディオPCM信号が供給されている。この入力信号は、例えばいわゆるQMF等の帯域分割フィルタ11により0～11kHz帯域と11kHz～22kHz帯域とに分割され、0～11kHz帯域の信号は同じくいわゆるQMF等の帯域分割フィルタ12により0～5.5kHz帯域と5.5kHz～11kHz帯域とに分割される。帯域分割フィルタ11からの11kHz～22kHz帯域の信号は、直交変換回路の一例であるMDCT(Modified Discrete Cosine Transform)回路13に送られ、帯域分割フィルタ12からの5.5kHz～11kHz帯域の信号はMDCT回路14に送られ、帯域分割フィルタ12からの0～5.5kHz帯域の信号はMDCT回路15に送られるところにより、それぞれMDCT処理される。なお、各MDCT回路13、14、15では、各帯域毎に設けたブロック決定回路19、20、21により決定されるブロックサイズに基づいてMDCT処理がなされる。

【0042】ここで、上記プロック決定回路19、20、21により決定される各MDCT回路13、14、15でのブロックサイズの具体例を図5のA及びBに示す。なお、図5のAには直交変換プロックサイズが長い場合(ロングモードにおける直交変換プロックサイズ)を、図5のBには直交変換プロックサイズが短い場合(ショートモードにおける直交変換プロックサイズ)を示している。この図5の具体例においては、3つのフィルタ出力は、それぞれ2つの直交変換プロックサイズを持つ。すなわち、低域側の0～5.5kHz帯域の信号及び中域側の5.5kHz～11kHz帯域の信号に対して

は、長いブロック長の場合(図5のA)は1ブロック内のサンプル数を128サンプルとし、短いブロックが選ばれた場合(図5のB)には1ブロック内のサンプル数を32サンプル毎のブロックとしている。これに対して高域側の11kHz～22kHz帯域の信号に対しては、長いブロック長の場合(図5のA)は1ブロック内のサンプル数を256サンプルとし、短いブロックが選ばれた場合(図5のB)には1ブロック内のサンプル数を32サンプル毎のブロックとしている。このようにして長いブロックが選ばれた場合には各帯域の直交変換プロックのサンプル数を同じとして高域間時間分解能を上げ、なかなかブロック化に使用するウインドウの幅を源らしている。なお、上記プロック決定回路19、20、21で決定されたブロックサイズを示す情報は、後述の適応ビット配分符号化回路16、17、18に送られると共に、出力端子23、25、27から出力される。

【0043】再び図5において、各MDCT回路13、14、15にてMDCT処理されて得られた各周波数帯域のスペクトルデータあるいはMDCT係数データは、いわゆる範界帯域(クリティカルバンド)または高域では更にクリティカルバンドを分割した帯域毎にまとめられて適応ビット配分符号化回路16、17、18に送られている。

【0044】適応ビット配分符号化回路16、17、18では、上記プロックサイズの情報、及び範界帯域(クリティカルバンド)または高域では更にクリティカルバンドを分割した帯域毎に割り当てられたビット数に応じて各スペクトルデータ(あるいはMDCT係数データ)を重音化(正規化して重音化)するようになっている。適応ビット配分符号化回路16、17、18で符号化されたデータは、出力端子22、24、26を介して取り出される。また、当該適応ビット配分符号化回路16、17、18では、どのような信号の大きさに関する正規化がなされたかを示すスケールファクタ情報と、どのようなビット長で重音化がされたかを示すビット長情報(語録情報)も求めており、これらも同時にに出力端子22、24、26から出力される。

【0045】また、図5における各MDCT回路13、14、15の出力からは、上記範界帯域(クリティカルバンド)または高域では更にクリティカルバンドを分割した帯域毎のエネルギーが、例えば当該バンド内の各周波数の2乗平均の平方根を計算すること等により求められる。もちろん、上記スケールファクタそのものを以後のビット配分の際に用いるようにしてもらいたい。この場合には新たなるエネルギー計算の演算が不要となるため、ハーバード構造の筋道となる。また、各バンド毎のエネルギーの代わりに、重複値のピーク値、平均値等を用いることも可能である。

【0046】ここで、上記適応ビット配分符号化回路16、17、18のより具体的な構成を図6で説明する。この回

(7)

特開平7-169292

12

6に示す適応ビット配分回路では、MDC T係数の大きさが各ブロック毎に求められ、そのMDC T係数が入力端子801に供給される。当該入力端子801に供給されたMDC T係数は、帯域毎のエネルギー算出回路803に与えられる。帯域毎のエネルギー算出回路803では、クリティカルバンド又は帯域においてはクリティカルバンドを更に分割したそれぞれの帯域に関する各信号エネルギーを算出する。帯域毎のエネルギー算出回路803では、エネルギー算出されたそれぞれの帯域に関するエネルギーは、エネルギー依存ビット配分回路804に供給される。

【0047】エネルギー依存ビット配分回路804では、使用可能なビットを発生回路802からの使用可能ビット、本実施例では1.28Kbpsの内のある割合(本実施例では1.00Kbps)を用いて白色の音素の候補を作り出すようなビット配分を行う。このとき、入力信号のトーナリティが高いほど、すなわち入力信号のスペクトルの凸凹が大きいほど、このビット量が上記1.28Kbpsに占める割合が増加する。なお、入力信号のスペクトルの凸凹を検出するには、該接続部のプロックのプロックフローティング係数の差の絶対値の和を指標として使う。そして、求められた使用可能なビット量につき、各帯域のエネルギーの対数値に比例したビット配分を行う。

【0048】既対応容音率レベルに依存したビット配分算出回路805は、先ず上記クリティカルバンド毎に分割されたスペクトルデータに基づき、いわゆるマスキング効果等を考慮した各クリティカルバンド毎の許容ノイズ量を求め、次に既対応容音率スベクトル量を求める。このようにして求められたエネルギー依存ビットと既対応容音率レベルに依存したビットは加算され、図4の適応ビット配分符号化回路1、6、17、18により各クリティカルバンド毎にしくは帯域においてはクリティカルバンドを更に複数倍に分割した帯域に割り当てられたビット数に応じて各スペクトルデータ(あるいはMDC T係数データ)を再配置するようにしている。このようにして符号化されたデータは、図4の出力端子2、24、26を介して取り出される。

【0049】さらに詳しく上記既対応容音率スベクトル依存のビット配分回路805中の既対応容音率スベクトル算出回路について説明すると、MDC T回路13、1、4、15で取り出されたMDC T係数が上記既対応容音率算出回路に与えられる。

【0050】図7は上記既対応容音率算出回路をまとめて説明した一具体例の概略構成を示すブロック回路である。この図7において、入力端子521には、MDC T回路13、14、15からの周波数領域のスペクトルデータが供給されている。

【0051】この周波数領域の入力データは、帯域毎の

エネルギー算出回路522に送られて、上記クリティカルバンド(離異帯域)毎のエネルギーが(例えば当該バンド内の各振幅値2乗の総和を計算すること等により求められる)この各バンド毎のエネルギーの代わりに、振幅値のピーク値、平均値等が用いられることがある。このエネルギー算出回路522からの出力として、例えば各バンドの能動矩のスベクトルは、一時的にバーカスペクトルと称されている。図8はこのような各クリティカルバンド毎のバーカスペクトルSBを示している。ただし、この図8では、回路を簡略化するため、上記クリティカルバンドのバンド数を12バンド(B1～B12)で表現している。

【0052】ここで、上記バーカスペクトルSBのいわゆるマスキングに於ける影響を考慮するために、該バーカスペクトルSBに所定の重み付け閾数を掛けた加算するような疊込み(コンボリューション)処理を施す。このため、上記帯域毎のエネルギー算出回路522の出力を、各帯域毎の各バンドの各疊込み(フィルタ回路)523に送られる。疊込みフィルタ回路523は、例えば、入力データを順次遅延させる波段の遮断素子と、これら遮断素子からの出力にフィルタ係数(重み付け閾数)を乗算する複数の乘算器(例えば各バンドに対応する25個の乘算器)と、各乗算器出力の和をとる総和加算器から構成されるものである。なお、上記マスキングとは、人間の聴覚上の特性により、ある信号によって他の信号がマスクされて聞こえないなる現象をいうものであり、このマスキング効果には、時間領域のオーディオ信号による時間軸マスキング効果と、周波数領域の信号による時間軸マスキング効果がある。これらのマスキング効果により、マスキングされる部分にノイズがあったとしても、このノイズは聞こえないことになる。このため、実際のオーディオ信号では、このマスキングされる範囲内のノイズは許容可能なノイズとされる。

【0053】ここで、上記疊込みフィルタ回路523の各乗算器の乗算係数(フィルタ係数)の一具体例を示す。任意のバンドに対応する乗算器Mの係数を1とするとき、乗算器M-1で係数0.15を、乗算器M-2で係数0.0019を、乗算器M-3で係数0.0000086を、乗算器M+1で係数0.4を、乗算器M+2で係数0.06を、乗算器M+3で係数0.007を各遮断素子の出力に乗算することにより、上記バーカスペクトルSBの疊込み処理が行われる。ただし、Mは1～25の任意の整数である。

【0054】次に、上記疊込みフィルタ回路523の出力は引算器524に送られる。該引算器524は、上記疊込んだ領域での後述する許容可能なノイズレベルに対するレベルQを求めるものである。なお、当該許容可能なノイズレベル(許容ノイズレベル)に対応するレベルQは、後述するように、逆コンボリューション処理を

(8)

特開平7-160292

13

を行うことによって、クリティカルバンドの各バンド毎の許容ノイズレベルとなるようなレベルである。ここで、上記引算器524には、上記レベル α を求めるための許容閾数（マスキングレベルを表現する閾数）が供給される。この許容閾数を地図化することで上記レベル α の制御を行っている。当該許容閾数は、次に説明するような（n-a）閾数発生回路525から供給されているものである。

【0055】すなわち、許容ノイズレベルに対応するレベル α は、クリティカルバンドのバンドの低域から順に与えられる番号 α とすると、次の式で求めることができる。

$$\alpha = S - (n - a)$$

この式において、n、aは定数でa>0、Sは量込み処理されたバーカスベクトルの強度であり、式中(n-a)が許容閾数となる。例としてn=3.8、a=-0.5を用いることができる。

【0056】このようにして、上記レベル α が求められ、このデータは、計算器526に伝送される。当該計算器526では、上記量込みされた領域での上記レベル α を逆コンポリューションするためのものである。したがって、この逆コンポリューション処理を行うことにより、上記レベル α からマスキングスレッショールドが得られるようになる。すなわち、このマスキングスレッショールドが許容ノイズスペクトルとなる。なお、上記逆コンポリューション処理は、渡徳な音質を必要とするが、本実施例では簡略化した計算器526を用いて逆コンポリューションを行っている。

【0057】次に、上記マスキングスレッショールドは、合成回路527を介して減算器528に伝送される。ここで、当該減算器528には、上記領域毎のエネルギー検出回路522からの出力、すなわち前述したバーカスベクトルSBが、運達回路529を介して供給されている。したがって、この減算器528にて上記マスキングスレッショールドとバーカスベクトルSBとの源算演算が行われることで、図3に示すように、上記バーカスベクトルSBは、該マスキングスレッショールドFMSのレベルで下位レベル以下がマスキングされることになる。なお、運達回路529は上記合成回路527以前の各回路での運達量を考慮してエネルギー検出回路522からのバーカスベクトルSBを運達させるために設計られている。

【0058】当該減算器528からの出力は、許容報音補正回路530を介し、出力端子531を介して取り出され、例示すれば部分ビット数情報を示すROM等（顯示部5）に送られる。このROM等は、上記減算回路528から許容報音補正回路530を介して得られた出力（上記各バンドのエネルギーと上記ノイズレベル設定手段の出力との差分のレベル）に応じ、各バンド毎の配分ビット数情報を出力する。

14

【0059】このようにしてエネルギー抵消ビットと職業許容報音レベルに依存したビットは算出され、その部分ビット数情報を用いて当該適応ビット配分符号化回路！6、17、18では符号化が行われる。

【0060】すなわち要約すれば、適応ビット配分符号化回路16、17、18では、上記クリティカルバンドの各バンド番号（クリティカルバンド）最もしくは高域においてはクリティカルバンドを更に持続帯域に分割した帯域のエネルギーもしくはピーク値と上記ノイズレベル設定手段の出力との差分のレベルに応じて配分されたビット数で上記各バンド毎のスペクトルデータを量子化することとなる。

【0061】ところで、上述した合成回路527での合成の際には、最も小可聴カーブ発生回路532から供給される図9に示すような人間の聴覚特性であるいわゆる最小可聴カーブRCを示すデータと、上記マスキングスレッショールドFMSとを合成することができる。この最小可聴カーブにおいて、総音絶対レベルがこの最小可聴カーブ以上では該許容音は聞こえないことになる。この最小可聴カーブは、コーティングが同じであっても例えれば再生時の再生ボリュームの違いで異なるものとなが、現実的なディジタルシステムでは、例えば16ビットダイナミックレンジへの音楽のはいり方にほぼはど違がなないで、例えば4 kHz付近の最も耳に響きやすい周波数帯域の音量化能が聞こえないとすれば、他の周波数帯域ではこの最小可聴カーブのレベル以下の音量化能は聞こえないと考えられる。したがって、このように例えばシステムの待つダイナミックレンジの4 kHz付近の様音が聞こえない使い方をすると仮定し、この最小可聴カーブRCとマスキングスレッショールドFMSと共に合成することで許容ノイズレベルを得るようになると、この場合の許容ノイズレベルは、図9中の斜線で示す部分までとができるようになる。なお、本実施例では、上記最小可聴カーブの4 kHzのレベルを、例えば20ビット相当の最低レベルに合わせている。また、図9は、信号スペクトルSSも同時に示している。

【0062】また、上記許容報音補正回路530では、補正情報出力回路533から送られてくる例えは等ラウドネスカーブの情報に基づいて、上記減算器528からの出力における許容報音レベルを補正している。ここで、等ラウドネスカーブとは、人間の聴覚特性に関する特性曲線であり、例えは1 kHzの純音と同じ大きさに聞こえる各周波数での音の音圧を求めて曲線で描んだもので、ラウドネスの等感度曲線とも呼ばれる。またこの等ラウドネス曲線は、図9に示した最小可聴カーブRCと略同じ曲線を描くものである。この等ラウドネス曲線においては、例えは4 kHz付近では1 kHzとのところより音圧が8~10 dB下がっても1 kHzと同じ大きさに聞こえ、逆に、50 Hz付近では1 kHzとの音圧

(9)

特開平7-169292

16

15

よりも約1.5 dB高くないと同じ大きさに聞こえない。このため、上記最小可聽カーブのレベルを越えた騒音（許容ノイズレベル）は、該等ラウドネス曲線に応じたカーブで与えられる周波数特性を持つようにするのが良いことがわかる。このようなことから、上記等ラウドネス曲線を考慮して上記許容ノイズレベルを修正することは、人間の確実性特に適合していることがわかる。

【0063】以上述べた騒音許容騒音レベルに依存したスペクトル形状を使用可能統合ビット128 Kbps内のある割合を用いるビット配分でくる。この割合は入力信号のトーナリティが高くなるほど減少する。

【0064】次にビット量分割手法について説明する。図6に戻って、MDCT回路出力が供給される入力端子801からの信号は、スペクトルの滑らかさ算出回路808にも与えられ、ここでスペクトルの滑らかさが算出される。本実施例では、信号スペクトルの絶対値の瞬間の差の絶対値の和を、信号スペクトルの絶対値の和で割った値を、上記スペクトルの滑らかさとして算出している。

【0065】上記スペクトルの滑らかさ算出回路808の出力は、ビット分割率決定回路809に与えられ、ここでエネルギ依存のビット配分より、騒音許容騒音スペクトルによるビット配分のビット分割率が決定される。ビット分割率はスペクトルの滑らかさ算出回路808の出力値が大きいほど、スペクトルの滑らかさが無いと考えて、エネルギ依存のビット配分より、騒音許容騒音スペクトルによるビット配分に重点をおいたビット配分を行う。ビット分割率決定回路809は、それぞれエネルギ依存のビット配分及び騒音許容騒音スペクトルによるビット配分の大きさをコントロールするマルチブレイヤ811及び812に対してしてコントロール出力を送る。ここで、既にスペクトルが滑らかであり、エネルギ依存のビット配分に重きをおくように、マルチブレイヤ811へのビット分割率決定回路809の出力が0.8となる。これら2つのマルチブレイヤの出力はデータ806で足し合わせて最終的なビット配分情報をとなって、出力端子807から出力される。

【0066】次に、図10には、上記図4の圧縮符号化回路に応する伸張復号化回路の構成を示す。【0067】この図10において、各帯域の音子化されたMDCT係数、入力端子122、124、126に与えられ、使用されたプロックサイズ情報は、入力端子123、125、127に与えられる。復号化回路111、117、118では適応ビット配分情報を用いてビット割当を解除する。

【0068】次に、IMDCT回路113、114、115では周波数領域の信号が時間領域の信号に変換される。これらの部分帯域の時間領域信号は、IQM回路

112、111により、全体域信号に復号化される。その後、IQM回路111、112で帯域合成がなされ、出力端子110から出力される。

【0069】

【発明の効果】上述したように、本発明の多層符号化装置においては、第1の符号化手段で各チャネルのデジタルオーディオ信号を圧縮符号化した後、その第1の符号化手段の出力信号化信号に対して、さらに第2の符号化手段によってチャネル毎のエネルギーに応じた比率で、各チャネルの情報量を割り当てる符号化を行うことにより、チャネル間のビット配分と高圧縮率を可能としている。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明実施例の多層符号化装置の概略構成を示すブロック回路図である。

【図2】8チャネルデジタルサラウンドシステムにおけるスピーカの配置を説明するための図である。

【図3】チャネル間クロストークを行う主要構成要素の構造模式を示すブロック回路図である。

【図4】本実施例の圧縮符号化回路の構成例を示すブロック回路図である。

【図5】圧縮符号化回路での信号の周波数及び時間分割を示す図である。

【図6】情報信号の大きさ及び騒音許容騒音スペクトルの2者を用いたビット配分手法を実現する構成を示すブロック回路図である。

【図7】許容騒音レベルを求める構成を示すブロック回路図である。

【図8】各帯域の信号レベルによるマスキングレスショールドの例を示す図である。

【図9】情報スペクトル、マスキングレスショールド、最小可聽限界を示す図である。

【図10】本実施例の圧縮符号化回路に対応する伸張復号化回路の構成例を示すブロック回路図である。

【符号の説明】

202、～202.・・・圧縮符号化回路

203、～203.・・・エントロピー符号化回路

204、～204.・・・サブ情報圧縮回路

205、～205.・・・適応疊合化回路

206・・・マルチブレイヤ

208・・・情報スペクトルエンベロープ検出回路

209・・・分配決定回路

221・・・ローパスフィルタ

222・・・ハイパスフィルタ

223・・・加算回路

11.12・・・・・・・帯域分割フィルタ

13.14.15・・・・・MDCT回路

16.17.18・・・・・適応ビット配分符号化回路

19.20.21・・・・・プロックサイズ決定回路

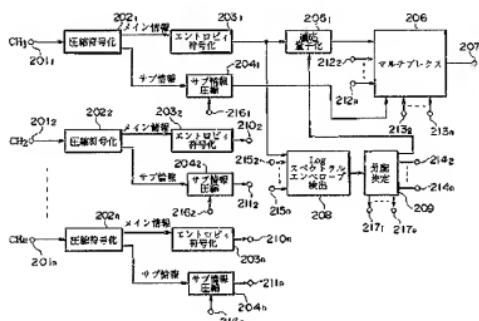
50 22.24.26・・・・・符号化出力端子

(10) 特許平7-160292

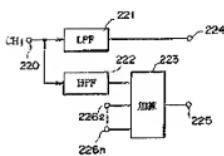
18

2.3. 2.5, 2.7 ·····	プロックサイズ情報出力端子	* 5.2.8 ··· 検算箇
1.16, 1.17, 1.18 ·····	適応ビット配分復号化回路	5.3.0 ··· 許容範囲検正回路
5.2.0 ·····	最小河間カーブ発生回路	5.3.2 ··· 最小河間カーブ発生回路
5.2.1 ·····	補正情報出力回路	5.3.3 ··· 補正情報出力回路
1.13, 1.14, 1.15 ·····	IMDCT回路	8.0.1 ··· IMDCT回路出力端子
1.12, 1.11 ·····	IQMF回路	8.0.2 ··· 使用可能範囲ビット発生回路
5.2.0 ·····	許容範囲算出回路	8.0.3 ··· 城域毎のエネルギー算出回路
5.2.1 ·····	許容範囲算出回路入力端子	8.0.4 ··· エネルギ依存のビット配分回路
5.2.2 ·····	帯域域のエネルギー検出回路	8.0.5 ··· 許容範囲音レベル依存のビット配分回路
5.2.3 ·····	疊込みフィルタ回路	10.8.0 ··· アダ
5.2.4 ·····	引導端子	8.0.7 ··· 各城域のビット割当算出端子
5.2.5 ·····	n=1周期発生回路	8.0.8 ··· スペクトラルの滑らかさ算出回路
5.2.6 ·····	削波器	8.0.9 ··· ビット分割率決定回路
5.2.7 ·····	会員登録	*
		8.1.1, 8.1.2 ··· マルチブライア

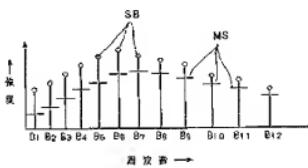
[图 1]



[圖 3]



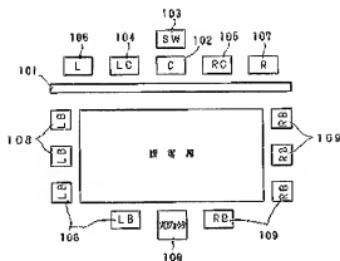
[图8-1]



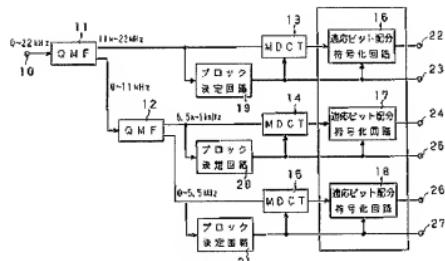
特開平7-160292

(11)

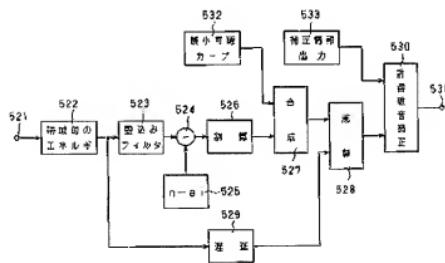
【図2】



【図4】



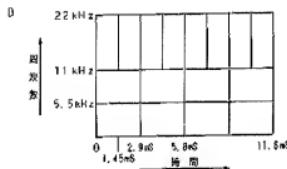
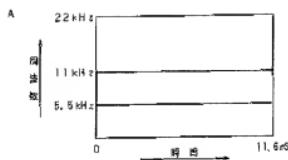
【図7】



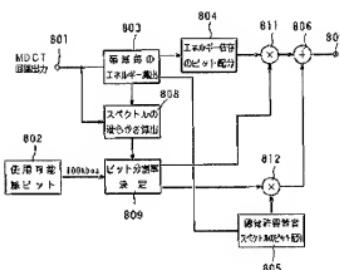
(32)

特開平7-160292

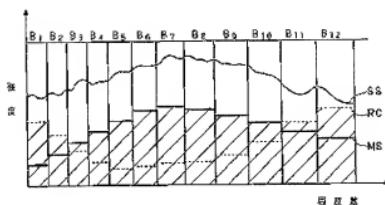
【図5】



【図6】



【図9】



(13)

特許平7-160292

[図10]

